

第24回大会報告記

中 窪 靖

第24回日本アイリス・マードック学会年次大会が、11月23日勤労感謝の日の土曜日に京都文教大学にて開催された。例年と同様、研究発表が4件と特別講演という構成となった。

一番目の発表者は、2023年度に新会員となった柘木雅哉氏で、修士論文を基にした発表を披露した。マードックは、*The Black Prince*によって、芸術とは真実を導き出すことがいかに困難であるかを示していると結論付けた。

二番目は、ポール・ハラール会長が2023年にカンヌ映画祭で最優秀男優賞を受賞したヴィム・ベンダース監督の『パーフェクトデイズ』を、マードックの善の思想にひきつけて解釈した。特に、映画の中に、彼女の詩作品の中にあるロマン主義思想と日本の禅仏教思想とに共通するものを指摘した。

三番目は、フィオナ・トムキンソン氏がエドモンド・スペンサーの *The Fairie Queene* とマードックの *The Nuns and the Soldiers* を比較し論じた。スペンサーの *The Fairie Queene* の中に登場する騎士と、*The Nuns and the Soldiers* の登場人物とを比較してその類似性を明らかにした。特に発表者は、色の象徴性に注目した。例えば、イングランドの守護聖人の旗の色が赤と白であることと、マードック作品の中心人物である伯爵の母国のポーランドの国旗にも赤と白が使われていることを指摘した。

四番目は、ウェンディ・ジョーンズ・中西氏が、三島由紀夫の晩年の連作『豊饒の海』の第二作目に置かれている『奔馬』*Runaway Horses* と1916年の復活祭に起こったダブリンでの武装蜂起を題材にしたマードックの *The Red and the Green* を比較し論じた。三島の作品は作者自身の割腹自殺の伏線となる。マードックの作品は彼女のルーツであるアイルランドの歴史をテーマにした唯一の作品である。いずれの作品も、国を愛する思いをそのテーマとしつつ、結果としては蜂起を先導した若者の意思は遂げられないままに終わる。

そして特別講演「道徳哲学者としてのアイリス・マードック」の演者として、福岡大学名誉教授の小林信行氏を招聘した。氏は、完全性とか充足性という概念をキーワードにしてマードックの道徳哲学の到達点をわかりやすく解説した。そこには、真理概念と善の感覚との結びつきがあった。それを媒介するのがダイモンと呼ばれる存在である。また、道徳哲学は日常の言葉で実践されるべきものであるとの観点から、マードックがその活動の中心を哲学から小説に移したと解釈した。マードック研究のトレンドが彼女の哲学に傾斜している現状を鑑みるとタイムリーな内容であり、マードック研究者にとっては新しい知見を得る機会となったと思われる。

最後に、コロナ禍が小康状態になった昨年より対面とオンラインを合わせたハイフレックスによる年次大会の実践を行っているが、今年度はオンラインでの参加者にメイン会場の映像と音声を常時届けることが可能となったことを申し添えたい。